

『教皇フランシスコ』

2016年05月09日

荘厳なサンピエトロ大聖堂、バチカン国の政治的な権力構造、人々を平伏させる教皇に私はなじめない。ガリラヤ湖畔で、埃まみれの服を着、擦り切れたサンダルを履いて、神の国を宣教した主イエスとは違うと思うからである。しかし、世界に11億人の信者を抱えるカトリック教会は現在のバチカン、教皇の形になることが必然であったのであろう。

イギリス人の作家、ジャーナリストのオースティン・アイヴァリーが、600頁にも及ぶ『教皇フランシスコ キリストとともに燃えて』を著している。2013年に「ローマ教皇フランシスコ」になったホルヘ＝マリオ・ベルゴリオの生涯を活写した伝記である。1,300年以上、欧州出身の教皇が続いたが、はじめてアルゼンチン人から教皇として即位した。著者アイヴァリーは教皇フランシスコの信仰と人柄と知性を知っていく中で、深い愛と尊敬を覚え、関連する出来事を網羅して著している。耳慣れない固有名詞が多く、何よりカトリックのことを知らないのだから、読み易い本とは言えない。しかし、惹かれて読んだ。

ホルヘは子どもの頃、貧しかったけれども、信仰深い、愛に溢れる家庭で成長している。17歳の時、司祭への献身を決意している。その時「祭司になる。でも、大聖堂で暮らす司祭になるつもりはないんだ。イエズス会に入って、町に出る。スラムの人たちとともに生きるんだ」と言った。神学校に入り研鑽に励む。諸々の学問はもとより、霊的な感性を高めるための訓練、修行には、ただ敬服する。プロテスタントの神学校とは桁が違う。

アルゼンチンは政治的、経済的に混乱を極めた。イエズス会もその混乱の渦中に巻き込まれるが、司祭になったベルゴリオは抑圧された、貧しい者に徹底的に寄り添う。「対立より一致」「部分より全体」「空間より時間」「思想より現実」という4つの原則に沿って、神の力は神の忠実な人々の中にあるという信仰で闘い抜いた。「私は教会を戦争の後の野戦病院と考えています。…私が夢見る教会は母親のような教会、女の羊飼いのような教会です」と言っている。ベルゴリオ司祭の「キリストの慈しみ」を説く言葉と行動は人々に信頼され、司教、大司教、枢機卿になっていく。

南米諸国は、米国的な新自由主義経済政策を進める潮流と民衆の生存・福祉を追及する社会主義的潮流が激しく対峙していた。政治権力もイエズス会も、その抗争に巻き込まれながら、互いに命を賭した闘いを展開している。その中から、民衆を主体にする「解放の神学」が台頭してきた。抑圧と貧しさに追いやられた民衆の解放を求める神学である。ベルゴリオ司祭は、もちろん「解放の神学」を継承、発展させる立場であった。「解放の神学」は南米各地で草の根のように広がっていった。しかし、マルキシズムの論理と見なされ、手痛い非難と攻撃を受け、バチカンも、当初「解放の神学」を支持していたが、危険な神学として否定するようになった。宣教師としてサンパウロ福音教会で奉仕していた小井沼國光師は、米国のレーガン大統領のバチカンへの圧力のせいであると言っていた。私はブラジルで、「解放の神学」に生きる喜び溢れる「信仰基礎共同体」をまぶしく見た。

教皇は終身制であるが、ベネディクト16世は歴史的な生前辞任をした。115名の枢機卿によって新教皇選出のコンクラーベが行われた。6回目の投票で、ベルゴリオは95票以上を得て、選出された。「私は罪人であるけれども受け入れる」と答え、「フランシスコと名乗らん」と言った。フランシスコという名は「貧しい者たちを忘れない」ことの象徴であった。彼の選出はバチカンの危機感が背景にあり、カトリック教会の再生と社会的影響力の復活を期待する歴史的必然性があった。教皇の発言は世界を動かす力がある。教皇フランシスコは命の尊厳を守り、和解を実現していく変革をもたらす働きをされると確信する。